

平成二十五年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム・パネルディスカッション・質疑応答

著者	木村 清孝, 橋本 弘道, 石田 千尋, 小林 馨, 下室 覚道
雑誌名	鶴見大学佛教文化研究所紀要
号	19
ページ	57-71
発行年	2014-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000008



パネルディスカッション・質疑応答

パネリスト

木村 清孝

橋本 弘道

石田 千尋

小林 馨

下室 覚道

司 会

司会 それでは、ただ今よりシンポジウムを始めさせていただきます。時間は三十分程度でございます。会場の皆様からたくさん質問をいただきましたので、それに答える形で進めていきたいと存じます。

特に橋本弘道先生に対する質問が多いため、まずお聞きしてみたいと思います。「宗教と科学は何かと対立すると思いますが、何故、湯川秀樹先生をこちらに呼び出したのでしょうか」という質問がありました。また、関連しまして、「是非、中根先生のお声をお聞きしたい」というご要望もありました。それでは橋本先生、お願いいたします。

橋本 「宗教と科学は何かと対立すると思いますが、何故、湯川秀樹先生をお呼びしたのでしょいか。」という質問と、

「是非、中根先生のお声をお聞きしたい」というご要望ですが、私は、宗教と科学は必ずしも対立するものではないと思います。中根先生の湯川先生をお招きになったときのご挨拶の言葉にその答えがあったように

も思いますので、まずは、中根先生の最期のお言葉を流したいと思います。約五分くらいだったと思いますので、少し長くなるかもしれませんが、この際ですので、全部お聞き頂ければと思いますすがいかがでしょうか（拍手）。よろしいでしょうか。それでは流したいと思います。よろしくお願いいたします。

（中根環堂先生の最期のお言葉）

博士先生をご紹介します。ただ今、私が湯川秀樹先生と申し上げたら、その名前を聞いただけでみんなびっくりして驚いた顔をなさつてありますでしょうか。それほど皆さんは、すでに先生をよく存じてありますのか。ようで、私がここでご紹介する必要はないでありますけれども、言うまでもないが、念のために申し上げますが、先生は京都大学の教授であらせられ、そして、米国コロンビア大学のまた教授であらせられ、あのノーベル賞の受賞者で、日本でたった一人のお方であります。世代の学会にあらせられる選者であります。全世界的に大臣、世界的に大学者であります。このお方は京都に住んでおられ、ところで、こんな立派な方が京都おいでになられたという事は、京都の名誉であり、京都の光栄であれ、京都の名誉主任として酔態するに皆さんがあります。私が申するに、京都の名誉主任である方に於いて、私は日本の全体、国民全体の名誉主任であると崇め奉るのであります。実に日本、世界的大学者、世界的に偉人であらせられます。さて、風向かられるお方でありますから、世界一忙しいお方であります。その始末には、私が先代京都へ参りまして、今日の講演をお願い参りました所、訪問者はたくさんおいでになつて、私に三分の話を頂戴することもできない程忙しいお方であります。然るにも関わらず、万難を排し、番匠を振り払い、そして今日、わざわざ遠方京都から、本学園のために講演のたれにおいでなされた。実に本校、本学園の名をこれ得るものにはありません。ただし、本学園の講演だけではなく、聴衆のみなさんも私はそうではな

橋本

いかと思います。この世界的大偉人、大学者のご講演をラジオやテレビに映らずして、直接に何事にも承れたという事は、真に汝何曜で、こんな機会はめつたにありません。私は、めつたには無く、絶対に無いと申し上げる程であります。だから、一期一会という思いで、今日はみなさん謹んで、一語一句もらさずに、清聴をしていただきたいとお願ひし、これから先生にご講演を願ひ奉る。先生はね今日は、科学文明の行方、科学文明の行方についてお話しされ、どうかご謙遜ください。ありがとうございます。（拍手）

講演の内容については、お話しされていませんでしたね。最初の答えは、講演前の中根先生の言葉にはありませんでしたが、中根先生はこの言葉を述べられた後に体調が急変され亡くなります。学園創立三十五周年記念式典のときですから、本当に苦労を重ねられて、三十五年間をかけて学園を育てられて、そして学園の発展を見届けて亡くなられたということだと思います。私も学園の歴史に関する資料をたくさん読みましたが、そこまでには、様々な苦労がありました。そのご苦労の礎の上に我々はいて、学園の発展を享受しているわけですから、そういう重みを毎日感じながら、これからも、私たちの後輩が学園をしっかりと受け継いでいくように、さらに学園を発展させていかなければならないのではないかと思います。

それから宗教と科学は矛盾するのではないかという質問ですが、私は、必ずしも矛盾するものではないと思います。もともと、西洋で自然科学が発達したのも、一説によれば、こんなに世界が秩序正しく動いているのは神が世界を司っている証拠だという考え方があったからだとされています。もともと神学から発展したのが自然科学であるという考え方です。

確かに歴史を顧みればキリスト教の教会とガリレオとの対立もありましたし、現在でも宗教と科学が対立しているように見える場面があります。今も、アメリカでは、神が人間を創造されたのだという聖書の記述と、

進化論との対立があり、公立学校で進化論を教えることに對してそれを阻止するための裁判が行われることもあるようです。そう考えると宗教と科学は対立しているという見方もできるのかもしれませんが。

しかし、仏教では、この世の中の現象について正しく把握していくことを重視していると考え、少なくとも仏教は、科学と対立する立場にはないと言えるのではないかと思います。世の中はどのように移り変わっていくのかということをしつかりと見定めていくということに、仏教の本質に迫る一つの側面があるのだと思います。そう考えると、世の中の様々なことを正確に把握しようとするところに科学の立ち位置があるとするならば、それは、仏教の立ち位置と同一なものではないかと思えます。ですから、仏教が成熟していつても、科学が発展していつても、両者はお互いに補充し合っていくのではないかと思うのです。このあたりにつきましましては、是非とも学長先生にもご意見を伺えればと思えますが。

司会

では、橋本先生の次にご質問が多かった先生ですけれども、小林先生です。橋本先生に對してはまだありますので、後ほど、時間がありましたらご質問させていただきたいと思えます。小林先生に對して、鶴見大学歯学部と他の大学の歯学部との特別な活動、他大学の歯学部とどの様に違うか」教えていただきたいと思えます。それと関連いたしましたして、「鶴見大学歯学部医療成果をもっと広くピアーアルしたほうがよいのではないかというご質問がありました。小林先生、お願いします。

小林

どうもありがとうございます。私共の大学と他の大学との一番の違いというのは、いわゆる貢献するという事が多い教育の理念になっております。最終的に多分これは無意識に、「報恩行持」の影響を受けたのではないかと思いますけれども、とにかく社会貢献をするのという事が、非常に強く他の歯学部と比べると多く謳わ

れています。他の歯学部での建学の精神というか学部の教育理念の中には、強い立派な精神的なものが多いのです。それから、歯学部ではありませんけれども、慈恵医科大学に代表されるような「病気を診ずして病人を診よ」という風のもが多く見られます。本学の場合は社会貢献をしていくのが第一だとしており、教員の「報恩行持」という事に非常救われています。自分たちの仕事を本当にする事が、もっとも重要な事なんだということをお教え下さっていると思います。何もあまり複雑に考えないで、きちんと仕事をしていくのが、私の行いですと言ってお下さっているわけですので、それに、頼っていただけるのは多分、本学の理念として非常に特徴的な部分ではないかと思えます。

本歯学部の色々な研究は、いろいろな事がやられています。今日は前田先生がいらっしやっておりますけれども、細菌学は細菌というものが、口の中にあると健康に害を起すという事だったり、それから、歯髄バンクといって、患者さんが歯を抜いた時の歯髄をそのまま保管し、iPS細胞をつくるという事もしています。それから、私の専門は放射線ですけれども、顎関節症を内視鏡で中を見て治療しますが、それを日本で初めの頃から行っていたのも本学ですし、エックス線検査と一緒にやったのは、本学が初めてでした。それから、義歯には尾花先生という大名人の先生がいます、ずっと義歯の臨床というものを本当に真摯にやってきました。非常に特徴的な臨床を、そして患者さんに貢献できる事をやってきたと思います。基礎的な研究も、しっかりしたもので、話し始めると切りが無くなるので、この辺で止めます。

司会

はい。ありがとうございます。続きまして石田千尋先生に対しての質問ですけれども、ちょっと具体的な事になってしまいますけれども、ご発表の中で国内の文化財を実習で扱うことが多いとありました。「海外の文化財や絵画、刀剣なども、扱うのでしょうか」というご質問がありました。石田先生お答えください。

石田

はい。質問の意味が少しわかりづらいのですが、「海外の文化財」は、もちろん授業で取り上げております。文化財学科には東アジアの考古学を専門にしている教員もおりますので、海外関係の事も扱っております。共通科目の中でも、世界史や海外に関わりのある科目をいくつか置いております。私も先程、下室先生から紹介いただきましたように、専門が日本史関係ですけれども、近世の日本とオランダ（オランダ東インド会社）との関係を扱っておりますので、授業の半分はオランダ史・東南アジア史・インド史などに関わりのあることを話しております。実は日本に関わる事を学ぼうとすると、日本の事だけでは当然すみません。海外の事も研究する事ではじめて日本および日本人のアイデンティティーがわかってくるのだと思っております。

次の質問はおそらく「絵画や刀剣なども実習で扱っているのですか」ということだと思いますが、絵画に関しては、実習ⅢBの「美術品の扱い」で掛け軸を扱うことがあります。また、実習ⅡAの「古文書の修復」の話の中で日本画の修復に関して触れることがあります。少し話しはかわりますが、卒業生で絵画専門の修復士を目指している者がおります。その卒業生は日本ではなく、イタリアに行つて今勉強しております。はじめ専門学校のようなところに入つて学んでいたのですが、先年久々に訪ねてきて大学に編入するので推薦状を書いてくれと頼まれました。日本に帰国していた時は、文化財学科の実習室に来て、漆器類の修復を学んでいました。余談になつてしまえますけれども、数年前四年生の実習旅行でイタリアに行った時、その卒業生がやつてきて、美術館や博物館、史跡等を案内してくれたと聞いております。

次に、刀剣についてですが、実は刀剣はうちの大学に数振りありまして、現在図書館で保管していただいております。今年の夏の集中実習（ⅢB）では刀剣の扱いをおこなう予定にしております。文化財学科は創設されて十六年たちましたけれども、設立時、文科省に書類を提出する際、学芸員課程の実績を強調致しました。当時、日文科・英文科の学生が八十人以上学芸員課程を取っていました。実はこの学芸員課程の授業を

担当していた教員が中心になって文化財学科を立ち上げたという経緯があります。その頃の学芸員課程の実習ですでに刀剣を扱っておりました。これもちよつと余談ですが、刀剣は当然のことですが非常に危険で、切れやすいものですから、先生方もその日はいつにもまして慎重に取り組まれていました。ここにいらつしやる方々の中で御存知の方もおられると思いますが、先年亡くなられました大三輪龍彦先生が学芸員課程の授業で中核の役割を果たされていきました。普段は飄々とされていらつしやいましたが、刀剣を扱う日はさすがに緊張されておられました。

先程の私の報告でもおわかりいただけただけかと思いますが、文化財学科の実習では各方面のことを扱っておりますし、また、やりたいこともたくさんありますが、学生からのリクエストがあれば、極力応えていきたいという姿勢で取り組んでおります。少し長くなりましたけれども、よろしいでしょうか。

司会

石田先生、ありがとうございました。続いて、木村先生へのご質問です。齋藤信義老師のご本の中に、曹洞宗系統には五つの大学があります。駒澤大学、愛知学院大学、東北福祉大学、駒澤女子大学、鶴見大学です。このうち、鶴見のご本山の系統が鶴見大学です。鶴見大学に仏教文化研究所をつくつたということは仏教を広く研究するためばかりでなく、瑩山禪師の研究を柱にする目的でつくつたわけです。そういう意味で、実際に視野を広げた時に、ご本山をどうするか。「一つは、学問的な裏打ちをした学問の研究をしなくてはなりませんね」というお言葉もあります。木村先生は、この仏教文化研究所の所長と致しまして、どのような考えをお持ちでしょうか。

木村

それでは、お答します。ご質問に齋藤信義老師のお名前が出てまいりましたが、初めてお聞きになる方もいらつしやると思います。研究所の設立の時に、柱になった方と申し上げればよいでしょうか。当時はご本山の

監院老師、いわば事務総長で、その後、副貫主にまでなられる方です。この方が中心的に活動されまして、研究所ができたということです。先ほど、岩本禪師のお話がありました。総持寺には元々の役割として、一般のみなさんと直に接して、本当の仏教精神を伝えていくということがあります。このことが歯学部創立に繋がっているわけですが、仏教文化研究所も、一つにはそれがあると思います。ですから、最初にお読みした「規程」にも、建学の精神に則って、仏教に関わる研究をになっていくという風になっているわけです。やはり、大きな目的は研究活動を通して、社会に貢献をしていくということです。私も、その点では全く同じでございます。

ただ、時代はどんどん動いて変わってきます。ですから、それに対応して、伝統的な路線を大事にしながら、具体的な場に出て行く必要があります。国際交流もそうですし、グローバルな情報の収集と発信もそうです。なるべく早く、そういう仕事ができるような方向性を考えていきたい。また同時に先ほど、学園全体のハートと申しましたけれども、地域貢献も含めて建学の精神に関わる中核的な役割を担うということももつとはつきりしていかなければならないと思います。大きくいえば、これら二つの方向が基本的な研究所の役割ではないかと私は思っております。

司会

ありがとうございます。今、最後にグローバルということがありましたが、ご質問の方で仏教のグローバル化という話が出ましたけれども、「同じ仏教として、他宗派の仏教の大学との連携はあるのでしょうか」というご質問があります。木村清孝先生は印度学仏教学会という大きな学会の理事長もなされておりました。木村先生、いかがでしょうか。

木村

今のご質問ですが、一つは、全国的な学会での交流・連携です。只今、下室先生からご紹介の日本印度学仏教学会は、会員が総数二千数百人おられます。実は、昨年度、本学がその開催校を依頼されまして、学内、学外から多くの関係者の支えを受けまして、六月末から七月初めにかけて学術大会が開かれました。こちらはちょうど耐震改修工事の期間中でしたけれども、皆さんのご協力で立派な学術大会を開催できました。この学会には、いわゆる仏教系の大学だけでなく、国内の諸大学から仏教研究者・インド学研究者が集まります。そのために自ら、全国を網羅するようなネットワークができ、他宗派の大学との連携も生まれてきます。本学会はそういう役割を果たしていると申し上げていいかと思えます。

もう一つはですね、仏教系大学会議というものがございます。これはまさに、各宗派、各宗門が設立した大学、あるいは深く関わっている大学が、各宗派でいろいろ違うところもあるのですが、ともかく仏教精神をベースにできていく大学が相互に連絡・連携しあい、勉強しあうというためのものです。これも、ずいぶん歴史があります。そこで、この会議からも大きな問題が起きた時に、社会に向けて何か発信をするようなことを考えたいというのでは、幹事校の先生方从前からお話をしているんです。残念ながら、色んな事情があつて、そこまではいっていないですけれども、ともかく、こういうベースがあることは重要だと思えます。それから、ついでに付け加えさせていただきますと、私は、仏教はこれからますます世界に向かって活動をし、発信していくべきだと考えています。土台はもちろん仏教の活動を支えてくれている信者さんたちと仏教研究者です。ところが仏教研究者は今、国際的に減ってきています。かつて日本における仏教研究の導き手となってくれたヨーロッパの各国の仏教研究が後退してきています。研究者の養成、インド学・仏教の継承・発展が難しくなってきました。ですから、ますます日本がこれを支えていかなくてはならないと思うのです。そういう意味でも、国際的な仏教研究の一つの拠点として、鶴見大学の仏教文化研究所がこれからますますしつかりしたものになっていくことを願っています。

司会

ありがとうございました。時間が過ぎておりますけれども、もう一点だけ、橋本先生に対して、「何故、女子教育を貫いてきたのに男女共学になってしまったのか」という事で、その他「クラス名が英・孝・仁などの由来は」という事。それから、小林先生に質問が「教職員だけでなく、歯学生徒にも現代版ヒポクラテスの誓いの朗読の徹底を願えますか」これらのご質問、お二人の先生にお願いしたいと思います。

橋本

では、私からでよろしいでしょうか。「何故、女子教育を貫いてきたのに男女共学になってしまったのか。」という質問と「クラス名が英・孝・仁などの由来は」という質問ですね。

クラスのことから先に説明させていただきます。クラス名は、現在も英・孝・仁・敬・貞・正…となつていきます。これは珍しいクラス名ですね。これらすべての文字が必ずしも仏教思想に由来するというわけではなく、思います。本学は、ご本山の学校として仏教主義の教育が展開されています。しかし、それと同時に、中根先生は、日本人のアイデンティティを確立していくための教育というものを大切にされてきました。ですから、純粋な仏教思想だけでなく、日本人の道徳観、倫理観を支えているような文字を一つひとつクラス名に盛り込んでいったと考えるとよいのではないかと思えます。具体的になぜこのような漢字一文字をクラス名にし、どうしてこの並びになったのかということについての資料は、見つけることができませんでした。ただ、私学としての独自性ということを中根先生は意識しておられて、本校の独自性を明確にするための一つの手段としてこのようなクラス名を付けられたという面もあるのではないかと思えます。

中根先生は、九年間アメリカに留学し、博士の学位を取得され日本に戻ってこられました。そして、駒澤大学で倫理学を教えておられました。ですから、国外から日本を見て、これからの日本にとって必要な教育とはどのような教育なのかということを感じておられたのではないかと思えます。その考え方がクラス名

を始めとする様々なものの名前に反映していると言えるのではないかと思います。

また、仏教主義教育を行うことについても様々な配慮をしておられたことがわかります。本学は、宗侶養成のための学校が発展したのではなく、純粹に在家教育のために設立された学校です。ですから、いきなり、入学式で仏壇を開けて読経ということになると生徒達がびつくりするといけないということで、入学式では読経なども行わなかったようです。また、生徒は、朝礼を行います。朝礼の際も、現在では黙然と言われると手を法界定印に組みますが、当時は、掌をクロスさせて膝の上に置く、普通の形であったようです。それを法界定印の形にしたのは、三澤先生が校長先生になられた頃からだと聞いたことがあります。このようなことからわかるように、中根先生は、在家教育について様々な意味で仏教主義教育におけるバランスを大事にされたのではないかと思います。

それから、もう一つは、「何故、女子教育を貫いてきたのに男女共学になってしまったのか。」という質問です。これは、先ほどの資料でも紹介しましたが、短大を設立するとき、中根先生は、将来的には本学園は男女共学を理想とすると述べられているわけです。ですから、それにつけるのではないかと思います。当時の時代状況を考えると、私学の場合は、男子校、女子校というように、男子教育と女子教育とを分けて行っていました。従って、それが時代の主流であったということだと思います。もちろん、瑩山禅師の誓願に基づいて「女性の自覚と向上」を目標に女子教育を貫いてきたわけですが、世の中が男女共学を首肯するような状況になれば、男女共学の学校にすることが理想であると仰っているわけですから、本学もその時代の流れの中でそうなっていたということだと思います。それは、すでに創立三十周年記念の時に仰っていたことです。また、これも先に申し上げたことですが、附属中・高の八代目の校長先生は、伊藤克子先生という方で、名前からもわかるように本学中・高では初めての女性の校長先生です。「女性の自覚と向上」を掲げながらも、

ずっと校長先生は男性の先生がなさってきたわけです。それは、よく考えるとおかしな話で、女子校ですから、もっと早くに女性の先生が校長先生になられてもおかしくなかったはずです。八代目にして初めて女性の先生が校長先生になられ、その校長先生が中・高を男女共学にするという決断を下されました。これは、本学にとつて非常に象徴的な出来事であつたと思います。要するに、「女性の自覚と向上」を教育目標に掲げてきた本学も、一時代の役割を果たし、「女性の自覚と向上」という教育目標を達成し、女性の力により次の段階にステップアップしたと考えることができるからです。

不易流行という言葉がありますが、本学における女子校最後の校長先生が女性の先生で、その先生が中・高を男女共学校へと導かれた。その意味では、中・高は、学校の形を大きく変えたわけですが、中根先生以来の仏教主義教育については、少しも変わっていません。むしろ、在家に対する仏教主義教育が男子生徒にも開かれたわけですから、さらに本学の教育が発展していく体裁を新たに整えることになつたというように捉えるべきなのではないかと思えます。

司会 ありがとうございます。小林先生いかがでしょうか。

小林 ありがとうございます。私は、昭和四十八年に女子教育から変わってしまった歯学部最初の男子として入学してしまいました。誠に訳ございませんでした。

ヒポクラテスの誓いは、今は、学生が五年生の時に病院に上がる時に、必ず教職員を含めて全員で朗読していますけれども、これからは入学した時にも、一度朗読するのもいいのではないかと思っております。ただ、私、せっかく三年前くらいからヒポクラテスの誓いをみんなで読むようにしたのですが、一つ欠けていた所

がございました。というのは、保護者の方をお招きするのを忘れていたんです。本当は、病院に上がるときに、百人ちよつとの学生がおりますので、その保護者の方をお招きしまして、共に、病院への患者さんへの医療の誓いをするというのが、望ましいのかなと思っております。来年はそのくらいを改善していきたいと思っております。

司会

ありがとうございます。大分時間が過ぎてしまいました。ここで、もう終了にしたいと思いますが、最後に統括といたしまして、「大覚円成 報恩行持」という建学の精神について、橋本先生の資料にもありましたように、「大覚円成」は人生の目標であり、それから「報恩行持」というのは社会貢献という、医療人の輪として進んでいかななくてはならないのかなと思います。ところで、『修証義』というお経の中に「行持報恩」という章があります。その中にですね、「私に費さざらんと行持するなり」という文章が道元禅師のお言葉としてありますけれども、「私に費さざらん」と、私に費やしてしまうんですね、今日は何んどこさいますからやめておこうとか、今日は眠いから寝てしまおうとか、そういう風になってしまいますけれども、「私に費やさざらん」、私に費やさないで、彼のため、彼女のため、親のため、子のため、そして、大学のため、会社のため、社会のため、そのようにしていかなくてはいけないと感じております。それがひいては「大覚円成」につながるのかなと考えました。そして、鶴見大学の役割、仏教文化研究所の役割としても社会貢献という事が重要ではないかと、改めて感じる次第でございます。以上で平成二十五年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウムを終わります。それでは、閉会の辞と致しまして、本学副学長であります、前田伸子先生に閉会の辞をお願い致したいと思います。

前田

土曜日の昼下がり長時間にわたりましてお付き合いただきましてありがとうございます。私が昭和四十五年に歯学部の一回生として入学した時には、すべて女子大でございました。女子寮に入りまして、その時、女子寮が「洗心寮」、「光華寮」という名前をもっている時でした。共学の高校から来ましたから、何という所に来たんだろうかと思つたのですが、そのうちに女子大学の歯学部は全国で唯一でしたので、この特色を活かして、これに誇りを持つていければなど思つておりました。しかし、途中で小林馨先生が入つてこられて共学になつたという訳です。そういつたことを思い出しながら、橋本弘道先生の話の中で、中高から出発しているということから、中根環堂先生それから三澤先生が本当に命を捧げて、今の私たちの道を切り開いてくださったんだなということを、先ほども湯川秀樹先生をご紹介されるお声を聞きながら感じました。それから、実は私自身「大覚円成 報恩行持」という建学の精神をよく理解しなければならぬ状況に置かれたのが、教授になつてすぐでした。当時は教育CPと言ひまして、文科省が特色ある私学の教育に補助金をくれるという事業がありまして、それを申請せよと学部長に言われまして、訳が分からず、書き始めますと、やはり建学の精神を全面的に国家にアピールしないといけないと分かりました。そこで初めて、「大覚円成 報恩行持」ということを何度も何度も、自分で噛み砕いて、初めて深く理解するようになりました。結局力不足で採択されませんでした、その後、今の職になりました、より深く理解できたところがございます。

それで、今日文学部は文化財学科を代表して、石田千尋先生がお話をしてくださいました、短期大学部、それから文学部の中でも、文化財学科、それから歯学部というのは、本当に実学に基づいているものですので、社会貢献だとか、社会に対する恩返しということは、非常にその学生自身も分かりやすいということ、教える方も教えやすい部分というものでございます。今日残念だったのは、文学部の他の学科の先生方が、非常に少なく、ドキュメンテーションの原田先生しかいらつしやらないので、例えば、他の学部、学科では、実学

に遠いところをどうやって、どういった所を社会貢献という事を強調して、教えていらっしゃるかというお話を聞いたらよかつたなと思っております。それが、残念でした。歯学部の方は私が出た大学、学部ですので、今日小林先生のお話をさせていただいて非常に分かりやすいお話だったので、ありがたいと思っております。

それで最後にこのお話をして終わりにしたいと思います。実は、いくら教員・職員が建学の精神を掲げて教育したといっても、それを実際に形にしてくれるのは学生さん達です。今日も最後まで会場に残ってくれている学生さんがいるんですけども、本学の学生さん達、十七年前の阪神大震災の時から、そして、三年前になります、東日本大震災の時、学生さんが主体となって、ボランティア活動しております。最初にやろうといったのは、歯学部の学生ですが、歯学部の学生だけではなくて、短期大学部、そして文学部の学生さん一緒になってボランティア活動を今も続けてやっております。十七年前に阪神大震災の時に、ボランティア活動をやった学生さんは、もう立派な大人になっておりますが、今ではそういったボランティア活動の一つのチームを立ち上げております。今、やっていらっしゃる学生さん達、私達教職員が文学部、短期大学部、歯学部と教育の面では融合することができなくて苦労しておりますけれども、学生さん達は、私達の力無しに、全員がそれぞれの特色を活かしてボランティア活動をしております。これこそが本当の社会貢献で、多分、私たちが教えたこと以上の事を学生さん達が立派に建学の精神を展開させて、活動をしているのではないかと思います。むしろ、私たちがの方が学生さん達の活動に学ばなければならないことがたくさんあったと思います。本当に今日は長時間のお付き合いありがとうございました。

司会

前田先生、ありがとうございます。これで閉会としたいと思います。四人の先生方、会場の皆様方ありがとうございました。